SHOW-HEYシネマルーム

★★★★★

郷　僕らの道しるべ

2023 年／日本映画
配給：　／約 100 分

2023（令和5）年 12 月 15 日鑑賞	DVD 鑑賞

Data　２０２３－１４８

監督・脚本・編集：伊地知拓郎
プロデューサー：小川夏果
出演：淵上岳／野口隆太郎／西郷マチュリ／蔵丸あみか／阿部隼也／古矢航之介／松元裕樹／とめ貴志／千歳ふみ／小川夏果

みどころ

1989 年のバブル崩壊後、“失われた 10 年”、“失われた 20 年”の中で“内向き思考”が強まった日本が次第に衰退していったのは当然だ。しかし、鹿児島出身の伊地知拓郎は、600 倍の難関を突破して唯一の日本人として北京電影学院に入学し、監督科を首席で卒業。そんな彼を支え、プロデューサーとしてコンビを組んだのが、こちらも北京電影学院に在籍したことのある女優の小川夏果だから、ビックリ！

2 人とも中国語はペラペラだが、デビュー作たる本作は、伊地知の故郷たる鹿児島で、ARRI 社の最高級カメラを駆使して撮影！そのテーマは「映画から《いのち》を考える。」、キャッチフレーズは「忘れない、命の素晴らしさ。」だから、何ともクソ難しそう！そう思ったが、いやいや！74 歳の私も“童心”に戻って、“我が故郷”を思い直すとともに、あらためて“私の道しるべ”を考える機会となった。それにしても、本作の撮影はすごい。構図はすごい。自然の描写はすごい。まるで数百枚の名画が約 100 分間も連なっているかのような感覚ははじめてだ。

近時の日本における若き才能の出現は、藤井聡太八冠や二刀流・大谷翔平が双璧だが、伊地知拓郎も中国の第 8 世代監督と競い合いながら成長すれば・・・。

そんな期待いっぱいのデビュー作に注目！伊地知拓郎×小川夏果のコンビにも注目！こんな映画こそ興行的にも成功してもらいたいものだ。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■伊地知監督に注目！鹿児島出身、北京電影学院卒、25 歳■□■

伊地知と聞けば、私は司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』に登場する、陸軍の軍人・伊地知幸介を思い出す。『坂の上の雲』は、松山市出身の秋山好古、真之兄弟と、真之の親友だ

った正岡子規の 3 人を主人公とした大河小説だ。そして、同作の前半は 3 人の若者の青春群像劇だが、後半は一転して、日露戦争の描写となる。そのハイライトの 1 つは、騎兵を率いる秋山好古を主役とした、日本陸軍とロシア陸軍との激突、とりわけ旅順要塞の攻防戦だ。そして、もう 1 つは、弟・秋山真之を主役とした、連合艦隊とロシアバルチック艦隊との日本海大海戦だ。

同書における伊地知幸介の登場シーンは、旅順攻略のために編成された乃木希典率いる第 3 軍の参謀長として旅順要塞の攻撃に向かう姿だが、同作における伊地知幸介の評価はボロクソ！その真偽は不明だが、司馬遼太郎の伊地知幸介に対するこの低評価には強い異論もあるらしい。それはともかく、同じ鹿児島出身で同じ伊地知姓なら、きっと、北京電影学院に 600 倍の倍率で日本人として唯一入学した伊地知拓郎は、きっとその末裔・・・？

■□■女優小川夏果のプロデューサーぶりに注目！■□■

私は 2017 年以降、日中友好協会の機関紙である『日本と中国』に「熱血弁護士・坂和章平　中国映画を語る」の連載をしており、2023 年 12 月で、その回数は計 81 回を数える。そんな縁で知り合ったのが、2021 年 10 月号の『日本と中国』の資料①の記事で読んだ日本人女優・小川夏果さんだ。大阪ではじめて会ったのは同年 12 月だが、そこで食事をしながら聞いた彼女の活動歴と現在の映画作りの姿勢、そして今後の人生設計の話に、私はいたく感動！全面的支援の約束をした。

その時に聞き、印象に残ったのが本作の撮影に使ったという ARRI 社のカメラの話。それは、あるきっかけによって、世界最大の機材メーカーである ARRI 社の生産する世界最高級カメラを無償で使用させてもらえる審査に応募し、無事それに合格したという話だった。伊地知監督×小川プロデューサーによる本作の撮影チームがこの審査に見事合格したことによって、本作の撮影については ARRI 社のカメラを自由に使って撮影できることになったわけだ。しかし、ARRI 社が、海のものと山のものとも分からない小川×伊地知チームにそれだけの援助をしたのは、このチームの実力と将来性を見込んでのこと。そう思っていたが、完成した本作を観て、まさにそのとおり！その出来の素晴らしさに仰天！私は、女優・小川夏果の実力のほどは知らなかったが、本作のスクリーンいっぱいに広がる ARRI 社のカメラによる撮影（映像）については、彼女のプロデューサーとしての能力（腕力？）に注目！

■□■伊地知×小川コンビに注目！日本の未来がその双肩に！■□■

日本には“姉さん女房”という言葉があるが、北京電影学院監督学科在籍、歴代唯一の日本人伊地知拓郎、同じく同学院に留学した小川夏果の姉さん女房チームが生み出したドキュメンタリードラマが本作。伊地知拓郎と小川夏果の“姉さん女房”チームは日本では唯一無二のものだ。伊地知の出身地である鹿児島を拠点として本作の製作が始まったのは、関西で長く過ごした小川夏果の生まれは熊本で、2 人とも根っからの“薩摩隼人”と“肥後もっこす”だったためだろう。本作のイントロダクションにはそんな 2 人のチームが資

料②の通り紹介されているので、これにも注目。

伊地知×小川コンビの処女作たる本作が日本で公開されれば、その評価が高まることは間違いない。しかし、私がこのコンビに期待するのは、北京電影学院を首席で卒業した伊地知はもちろん、単身で中国に渡って北京電影学院に留学し、その後すぐに中国語ペラペラの女優兼プロデューサーになった小川夏果さんにも中国のメディアも注目するはずだから、このコンビに巨大な中国市場で大活躍してもらうことだ。ちょっとしたきっかけで、一時的な人気を獲得する中国関連映画の日本人俳優や日本人監督は今も将来もいるだろうが、伊地知×小川コンビほど本格的な才能に恵まれた中国通はいないはずだ。そんな、まさに日本最強の中国通コンビには、その双肩に日本の未来が懸かっていると言っても過言ではない。

■□■このタイトルは？テーマは何？クソ難しそうだが■□■

本作のタイトルは『郷　僕らの道しるべ』だが、そもそも、郷はどう読むの？鹿児島は西郷隆盛で有名だが、本作のタイトルはそれとは関係なく、これは故郷の郷ということだろう。さらに、このタイトルには「映画から《いのち》を考える」という解説（?）がついている。そして、本作のキャッチフレーズは、「忘れない、命の素晴らしさ。」だ。そう読んだうえで、「僕らの道しるべ」というサブタイトルを合わせて考えれば、何となく本作のイメージが湧いてくる。

しかし、それにしても、「映画から《いのち》を考える」とか、「忘れない、命の素晴らしさ」とは何とも大げさな謳い文句だ。しかして、本作のテーマは一体ナニ？そして、「映画を通じた教育とメンタルヘルスの推進」って一体ナニ？鹿児島県教育委員会は、なぜ本作を後援することになったの？タイトル（周辺）だけからでも、そんなこんなの興味が湧いてくる。

■□■本作のストーリーは？わかったようなわからないような■□■

本作の公式ホームページによると、本作のストーリーは次のとおりだ。

> 走馬灯のように流れていく人生。
> 出会いと別れ、苦しみや喜び、大人になるにつれて忘れてしまう子ども心・・・
> これは鹿児島で生まれ育った少年ガクとリュウの物語。誰もが一度は感じるだろう、
> 美しいものや畏敬すべきものへの好奇心を取り戻す旅。

なるほど、なるほど。しかし、何となく分かったような、分からないような・・・。

私はジャン＝リュック・ゴダールのような抽象的な映画はあまり好きではない。また、小難しく、クソ難しい映画もあまり好きではない。しかし、タイトル（周辺）から考えると、本作にはそんなにおい（心配）もプンプンと。私は、一方でそんな不安を、他方で25歳の天才監督・伊地知の手腕に期待をしながら本作の鑑賞に入ることに。

■□■冒頭は高校球児の姿から！最初のテーマは競争！■□■

本作の冒頭は、グラウンドをランニングする高校球児たちの姿から始まる。私の出身地である愛媛県松山市には、高校野球の強豪校として有名な松山商業や新田高校、済美高校等があるが、鹿児島にも鹿児島実業等の有名な強豪校がある。しかし、本作の主人公として登場する（おとな）岳（西郷マチュリ）はまだ背番号も付けていない下級生のようだし、彼が入学している高校の野球部のレベルも全くわからない。本作の「一　競争」で描かれるのは、そんな高校球児、岳の競争物語だ。

岳が監督からバットの振りの鋭さを褒められたうえ、守備位置を尋ねられ、代打に起用され、背番号を与えられ、試合に出場できたのは幸いだったが、それを友人や先輩たちはどう見ていたの？2023 年 12 月 18 日現在、旧安倍派を中心とする自民党の派閥における裏金づくりが大問題になっており、12 月 15 日（金）に臨時国会が終了した後の 12 月 19 日（火）、検察は遂に強制捜査に踏み切った。政治家同士の競争はカネ（資金）の面でも、票獲得合戦の面でも、そして肝心の政策の面でも重要だが、別の角度で言えば嫉妬の世界、いじめの世界だ。すると、鹿児島のような地方都市のしがない高校（？）のしがない野球部（？）内の競争でも、嫉妬やいじめが・・・？そう思っていると案の定・・・。

本作の「一　競争」を見ていると、本作のストーリーはすごくわかりやすい。私の世代の「野球モノ」としては『巨人の星』や『ドカベン』等が有名だが、まさか本作もそれと同じような根性もの・・・？？いやいや、それは絶対ないはずだ。

一見、順風満帆に見えた、この野球部内における岳の成長物語は、ある日のある事故（いじめ）を契機として一転、とんでもない結末になってしまうが・・・。

■□■「二　童心」の撮影は絶品！こりゃ黒澤明以上！？■□■

「一　競争」における岳はセリフこそ少ないものの、“おとな岳”だから、その喜びや悲しみの表情から、彼の気持ちの動きを読み取ることができる。しかし、「二　童心」にみる、こども岳（淵上岳）と、こども隆（野口隆太郎）の姿からは、悲しみの表情を読み取ることは全くなく、童心のままに完全に自然に溶け込んでいる風景が続いていく。鹿児島には桜島があり、海がある。また、人家の近くには野原があり、山や川がある。そして、そこには美しい自然がある。そして、自然の中では雨が降り、川が流れ、太陽が照り、夕日になり、星が瞬く。また、野原の中ではカマキリの生存競争もある。

私はカメラ（撮影）が大好きだが、伊地知監督が ARRI の高級カメラを駆使して撮影したこれらの自然の描写は、お見事の一言だ。日本の巨匠・黒澤明はかつて、『乱』（84 年）の撮影を姫路城（一の城という設定）、熊本城（二の城という設定）、阿蘇（大観峰周辺と砂千里）等で行ったが、阿蘇砂千里の撮影では、阿蘇山の火山活動が活発化したり、噴煙の亜硫酸ガスの影響で中止したりすることがあったそうだ。また、同作ハイライトの合戦シーンは飯田高原で撮影され、2 日間のロケで 1000 人のエキストラと 200 頭の馬が動員されたそうだ。すると、同作の撮影は如何に？そしてまた、その費用は how much？同作の出来が絶賛され、同作の日本国内での興行収入は 16 億 7000 万円に上ったが、製作費が 26

億円もかかったため、結局巨額な赤字を背負ったらしい。本作の製作費は『乱』に比べると屁みたいなものだが、その撮影の出来は本作の映像（撮影）を見ていると、20 代半ばの若者、伊地知監督が巨匠の黒澤明監督と全く同じような努力をしていることがよくわかる。そして、その出来は黒澤明監督以上！？

■□■74 歳の私の郷は？その道しるべは？■□■

伊地知監督の出身地が鹿児島なら、私は松山。私の実家は市内の中心部にあり、大街道と銀天街という 2 つの商店街のすぐ近くだった。それでも、道後温泉や松山城は自転車で通える距離にあった。また、母親の実家は電車で約 20 分の郡中にあったが、子供時代の私にとって、同じく電車で 20 分の距離にある梅津寺の海水浴場とは異なる郡中の伊予灘の海は、いわば太平洋の荒波のようなものだった。また、小学生の時に行ったつくし採りや遠足の時には、丸一日かけて大冒険をした気分になったものだ。松山市内から少し離れた田舎にある母親の友人宅に行くと、そこには木登りや甲虫とり、とんぼとり等、都会育ちの私には珍しく楽しい出来事がいっぱいあった。他方、私は小学生時代に図書館の世界文学全集、日本文学全集、偉人伝等を全部読んだが、そこで印象に残っている「冒険モノ」は『トム・ソーヤーの冒険』、『海底 2 万マイル』、『ロビンソン・クルーソー』等々だ。

しかして、本作の「二　童心」を見ていると、74 歳の私の心も完全に松山の小学生時代に戻っていくことに。岳と隆の 2 人がボートに乗って向かった先は？その島に“上陸”した 2 人が見たものは？ボートに乗った 2 人が川を下っている時に流れる、誰もが知っている有名な音楽とは？

■□■本作の製作理念と教育映画事業にも注目！■□■

小川夏果さんを代表とするレシアニー＆コー合同会社の HP には、資料③のとおりの「映画『郷　僕らの道しるべ』制作理念」が掲載されている。これを読めば、伊地知拓郎という若者の、かなり頑固で理屈っぽい性格（？）がよくわかる。また、教育映画事業として資料④が掲載されているので、これを読めば、本作が狙っている展開がよくわかる。

デビュー作を作り、それを上映するについて、ここまで用意周到な準備をしていることに私はびっくり。これは今後も鹿児島を拠点に映画制作を続けていくぞ、という決意表明だろう。その心意気や良し！まずは鹿児島で、その理念を実現したうえで、将来的には日本はもとより、中国全土にわたって幅広い活動を展開してもらいたい。

「一　競争」「二　童心」に続く、本作の「三　無常」は、25 歳の監督がつけたものとは思えない、なんとも意味シンなタイトルだ。「二　童心」では川遊び、魚取り、山遊び、海への冒険等の映像が次々と流れたが、さて「三　無常」では？ 本作のセリフは「一　競争」以外ではほとんどないが、次々と登場してくる美しい映像を見ているだけで大いに感動すること間違いない。しかして、「三　無常」で流れてくる映像とは・・・？

■□■中国の第８世代監督を良きライバルに！■□■

日本は 1989 年のバブル崩壊後、“失われた 10 年”、“失われた 20 年”を経る中で、どん

どん衰退していった。学校教育における「競争の否定」という価値観の転換もあって、若き才能の発掘も伸びもめっきり減ってしまった。もっとも、そんな状況下でも、将棋界における藤井聡太の登場とあっという間の八冠達成や、囲碁界における芝野虎丸や仲邑菫女流の登場等を見ると、突然変異的に若き才能が出現してくることがよくわかる。プロ野球界における二刀流・大谷翔平の登場もそれだ。

他方、社会体制が日本とは全く異なる中国は、基本的にアメリカと同じ競争社会だ。それは映画界も同じで、国立の映画大学が 1 つもない日本と異なり、中国には北京電影学院をはじめとするエリート映画大学や演劇学校がたくさんある。それは韓国も同じだから、両国の映画界で次々と若き才能が育っているのは当然だ。中国で現在脚光を浴びている第 8 世代監督は、『凱里ブルース』（15 年）（『シネマ 46』190 頁）や『ロングデイズ・ジャーニー　この夜の涯てへ』（18 年）（『シネマ 46』194 頁）の毕赣（ビー・ガン）、『象は静かに座っている』（18 年）（『シネマ 46』201 頁）の胡波（フー・ボー）、『春江水暖～しゅんこうすいだん』（19 年）（『シネマ 48』199 頁）の顧暁剛（グー・シャオガン）、『宇宙探索編集部』（21 年）の孔大山（コン・ダーシャン）等だが、彼らの中には北京電影学院卒業のエリート監督ばかりではなく、いわゆる“叩き上げ”もいるから、バラエティ豊かで面白い。北京電影学院を首席で卒業した伊地知拓郎には、そんな中国の第 8 世代監督たちを良きライバルとして、切磋琢磨しながら成長してほしいものだ。

■□■“良き師匠”が不可欠だが、伊地知のそれは・・・？■□■

私は中国の歴史ドラマが大好き。とりわけ、春秋戦国時代から秦の始皇帝誕生に至る物語と、魏・呉・蜀の三国志の物語が大好きだ。日本でも原泰久の人気漫画を映画化した『キングダム』（19 年）（『シネマ 43』274 頁）が大ヒットし、シリーズ化に成功した（『シネマ 51』158 頁、『シネマ 53』217 頁）。私が現在ハマっているのが、『大秦帝国』全 51 話だ。また、8～10 月に見た『キングダム　戦国の七雄』全 7 話も興味深かった。

『大秦帝国』で現在展開している物語は、西の弱小国秦が当時の最有力国だった魏を中心とする六国から攻められて苦戦している時代。同作の主人公になる人物は、魏国の丞相を務めている公叔座の弟子である衛鞅（後の商鞅）だ。彼は公叔座が魏国の将来を託するに値すると絶賛している人物だが、身分が低いため、魏王はその登用に同意しなかった。そのため、衛鞅は魏国を離れて秦国に入り、秦国で重用されて左庶長などに重用され、ついには魏国を打倒するまでになったというからすごい。

ここでなぜそんな話を書くのかというと、公叔座と衛鞅との間で交わされる“師匠論”が私には興味深いからだ。たしかに衛鞅は天才だったが、その能力を発揮できたのは、公叔座という師匠に恵まれたからだ。しかして、天才・伊地知の師匠は一体誰？彼の才能を生かす師匠はいるの？もし私が伊地知監督と会う機会があれば、そんな点を是非話し合ってみたいものだ。

2023（令和 5）年 12 月 19 日記

資料①

『日本と中国』２２５７号（２０２１年１０月１日）

シネマティックな日々

第1話　取りつかれたように中国へ

6月、「ショートショートフィルムフェスティバル&アジア2021」オープニングセレモニーに監督の伊地知拓郎とプロデューサーとして参加しました。

テレビの夕方のニュース番組で、映画『その一瞬を噛み締めて』撮影現場の密着取材が複数回にわたり放送されました。

スタッフには日本人、中国人、オーストラリア人がいて、共通言語は中国語です。地元のエキストラの方々にもご協力いただいています。

昨年末、日中合作映画『その一瞬を噛み締めて』が鹿児島・薩摩半島でクランクインしました。2022年公開を目指し、絶賛制作中です。

賛成する人は誰一人いませんでした。

2019年の夏、当時「ニーハオ」と「シエシエ」しか知らなかった私は、ある日何かに取りつかれたように、中国で女優の活動がしたいと強く思うようになり、中国北京へ渡りました。

とにかく昔から中国が大好きでした。学生のころから二人で上海へ旅行に行き、中国語も話せないのに上海国際映画祭へ行ったりして、それでも自分には中国の雰囲気が肌に合っているような気がしていました。

日本ではずっと女優の活動をしていました。その前に大学卒業後の二年間は某銀行の法人営業部で働いていたりと少し変わった道を歩んでました。中国へ行ったときと同じように、私はいつも「何をすること」が自分にとっての幸せなのだろう」と考えます。これからの自分の人生を考えたときに、好きなことをして生きたい、いつも笑っていたい、と思いながら自分の人生を選んでいると思います。

中国での活動を選んだときも、日本にいる一年後、三年後、五年後の自分を想像したときに自分自身何も成長していないんじゃないかと思いました。オーディションに明け暮れる日々、たまに撮影という、ただ同じようなことを繰り返す毎日で自分の人生が怖いと感じてました。

そしてある舞台に出演したのがきっかけで、「海外で女優の活動がしたい」というずっと心に描いていた想いが確固たるものになりました。

小川夏果
女優・映画プロデューサー
2019まで主に日本で女優として活動。2019年9月より中国北京電影学院へ留学し、中国でも舞台や映画に出演し活動の幅を広げる。現在鹿児島を舞台にした映画『その一瞬を噛み締めて』では初プロデューサーを務め、制作中である。

『その一瞬を噛み締めて』公式動画

資料②

06 北京電影学院監督学科在籍、歴代唯一の日本人伊地知拓郎、同じく同大学に留学した小川夏果のタッグが生み出すドキュメンタリードラマ

INTRODUCE 紹介

[Takuro Ijichi]

伊地知拓郎

監督・脚本・編集・音楽・撮影

1988年3月30日生まれ。鹿児島県出身。語学を勉強するために高校を休学し、通信制の高校で英語と中国語を身につけた。哲学者である父の影響で幼いころから世界の様々な書籍や映画を観て育った。中国人も入学試験を経た北京電影学院の監督学科に2010年の秋季で受験し入学。現在、北京電影学院監督学科4年。脚本と音楽が趣味。作曲やギターの弾き語りも行う。

※北京電影学院：世界の映画社会主義的大学の中でトップ3に入る名門校としてハイランド誌にも掲載されている。卒業生には2020年冬季オリンピック開会の映画監督チャンイーモーやチュンカイターなど様々な著名人がおる地位。

現在、伊地知氏人の協働をもとに組いた初演的作品である初長編映画を制作中。脚本において海外との違い、メッセ、大学の仲間がいないことなどの様々な困難にぶち当たりながらも脚本に撮影を終え、2023年7月ごろ完成予定。

2016年ロッドンインディペンデントフィルム映画祭学生部門最優秀賞受賞

AOFFアムステルダム国際映画祭 学生部門受賞

南インドインディペンデント国際映画祭学生部門最優秀賞受賞

2020年ヒューモニン国際映画祭ファイナリスト

スウェーデン・ボデオ国際映画祭学生部門最優秀賞受賞　　その他多数受賞

[Natsuka Ogawa]

小川夏果

企画・共同監督脚本・出演・美術・衣装

1987年7月17日生まれ。長崎県出身。福岡で長く過ごし、同志社大学法学部卒業後、第九生命保険の法人営業部で3年勤めた後、事故に遭い大怪我から、たくさんの人にいい影響を与えられる人間になりたいと思い、女優に転身。

チョーヤ梅ッシュのCMソングでデビュー。TVドラマ・映画「仮面浪曲」や「長崎十景女」「法廷」など様々な作品に出演。演技や映画をもっと勉強せずに出演している自分に疑問を抱き、2019年芸能界の仕事を中断し、北京電影学院へ1年間留学する。中国語と映画制作について学び、そこで監督伊地知と出会い、伊地知作品に携わる。

2020年帰国し、初長編プロデュース作品を現在制作中。プロデューサーにおいて、制作・美術・衣装を担当。たくさんの方からのご協力とご支援のおかげで、無事に撮影を終えることができました。

2021年には、世界最大の映材メーカーである富士フイルムからのスポンサーシップを頂くことになり、初長編作品を全てFUJIFILMを使用して撮影。最もフィルムに近いと言われているオリジナルカメラは「神々の自然」がテーマになっている今作の映像の美しさを十分に引き出たかってくれています。

今作の完成に向け、また、監督伊地知とタッグを組み、海外に通用するような色々な作品を手掛けていきたいと思っています。

現在、世界三大国際の一つである東京国際映画祭長編の初ノミネーションとして、大長編の制作実行を目指す活動をしている。

メール：ogawanatsukaofficial@gmail.com SNS:@Ogawanatsu

資料③

映画から「いのち」を考える。

「郷 僕らの道しるべ」

監督・脚本 伊地知拓郎

～映画を通した教育とメンタルヘルスの重視～

鹿児島県教育委員会 後援

忘れない、命の素晴らしさ。

STORY

走馬灯のように流れていく人生。

出会いと別れ、苦しみや喜び、大人になるにつれて忘れてしまう子ども心・・・

これは鹿児島で生まれ育った少年ガクとリュウの物語。誰もが一度は感じるだろう、

美しいものや畏敬すべきものへの好奇心を取り戻す旅。

映画「郷　僕らの道しるべ」制作理念

人間が持つコミュニケーション手段の一つとして言語は使われるものですが、様々な芸術は言葉で伝えきれない感情や思想、何かを表現したり伝えるための手段として発展し、芸術は一種の言語であると考えています。映画は人間の五感を刺激する芸術であり、すなわち映画とは視聴覚言語であり、この視聴覚言語に私は人の心を動かす凄まじい力があると信じています。この作品では、大人になっても自然に触れ、自然を享受することが人々の人生にとっていかに大切かということを訴えかけています。私は映画を通して幸福を追求し、人々の幸福度を高め、世の中に良い影響を与えていけるような映画を作っていくことを目指し、取り組んでいます。

経済的に豊かになった日本社会の中で、イジメや登校拒否が増加し、子どもの幸福度が低く、またその親や学校側も疲弊しているという状況を目の当たりにしたときに、映画というものが人々の心に寄り添い、癒すことができるのではないか。また、映画が教育の一環として子どもたちの学びの場になることを願い、たくさんの子どもたち、そして、子供の教育の中にある尊さや難儀に全力で向き合っている先生や大人の方々に観て頂きたく、ここに私の想いを綴らせて頂きました。

伊地知拓郎

資料④

教育映画事業

鹿児島を舞台にした様々な映画作品、および企業紹介や商品説明動画、伝統をテーマにしたドキュメンタリー作品などを制作。

講演会・上映会・外部講師　～映画を通して子どもと大人の意見交換の場をつくる～

・芸術を通じて教育に新しい視点を取り入れ、学びの面白さと実用性を結びつける。
・映画を通じてメンタルヘルスの理解を深め、心の健康をサポートする。
・学校教育における授業の多様化と個々の生徒の特性への配慮を促進する。

授業例：
【卒業生講話】テーマ「留学」：留学経験と目標に向けて大切にしていること。
【特別講師】テーマ「想像力」：生徒と一緒に映画製作！正解のない芸術の答え合わせ。
【映画講話】テーマ「働く人に学ぶ」：生きる上で大切にしている３つのこと。

撮影・編集イベント・講師などお気軽にお問い合わせください。

お問い合わせはこちら

099-570-1622

営業時間 平中鹿秋
FAXも同じ 099-570-1622

メールでのお問い合わせはこちら